

菓子を究め、
菓子で作った人生だ。
いずれは、
ふるさと室戸に恩返しを。



スカイツリーを仰ぎ見る、東京は墨田区東向島。人情味豊かなこの下町風情の一面に、「菓子遍路」の文字がひととき目を引く。ついづられて店をのぞいた人は、「あ、やはり土佐の男だ」とびんとくるだろう。心意気に富んでいるのだ。しかしその男が、菓子の世界で名の売れた「師」であることには、すぐに気づかないかもしれない。腰が低く、けっしてエラそうに振舞わないから。

酒井哲治。生まれも育ちも室戸である。父は根っからの菓子職人だったが、酒井家末っ子は若き日、将来に迷い、人生を考えた。思うところあって東京に出る。向かった先は日本菓子専門学校。ふるさとを飛び出したのに、やはりそこだ。「餅屋は餅屋ですね、あはは」。

ただし、そこからが並みの男ではなかった。まさに寝食を忘れての修業暮らした。めきめき力がついた。修了し、銀座や神田の老舗でさらに高度な技術を身につけた。実力を評価され、母校の専門学校から教師として招かれる。「勉強時間が増えるから……」とそれに応じた。むろん菓子学の勉強だ。やってもやっても奥が深い。

20年、教師を続けた。教え子は全国に3,000人を越える。五十路を機会に、再び職人として始めたのがこの店だ。「一哲」は、一徹でもあるのだろう。物腰は柔らかいが、このうえなく頑固である。

ふるさとへの愛は深く、「青い空と広い海……」望郷の念は強い。菓子を究めた先の大きな夢の舞台は、やはりあの室戸の大地か。

菓子遍路 一哲
酒井哲治

室戸 じと、 進む。